

形容詞の敬語

——「お+形容詞」を中心に——

森 山 卓 郎

1 はじめに

日本語の敬語をどう整理するかということは、社会生活にも関わる重要な文法研究のテーマの一つである。平成一九年度文化審議会答申「敬語の指針」(平19.2.2)は、敬語を五つに分類し、尊敬語、謙讓語Ⅰ、謙讓語Ⅱ、丁寧語、美化語としている。これは、これまでの敬語の三分類すなわち尊敬語、謙讓語、丁寧語という分類に接続しつつ、辻村1967、大石1966、宮地1971、菊地1997など、三分類以降の研究の蓄積をいわばオーソライズしたものでもある。ただし、名称として、「謙讓語Ⅱ」は、宮地1971において「丁重語」とされたものであり、ここでは丁重語と呼ぶことにする。

こうして、敬語体系についての一定のまとめがなされてはいるのだが、まだいくつかの課題が残っている。その一つが形容詞における敬語である。敬語の在り方は、動詞と名詞の用法を中心に整理されてきたと言え、答申での形容詞をめぐる扱いは、「ございます」の語形の注釈を除けば、尊敬語をめぐる次のような一節だけである。

形容詞などの尊敬語 形容詞や形容動詞の場合は、語によっては「お忙しい」「御立派」のように「お」「御」を付けて尊敬語にすることができる。また「お」「御」のなじまない語でも「積極的でいらっしゃる」のように「……くていらっしゃる」「……でいらっしゃる」の形で尊敬語にすることができる。「お」「御」を付けられる語の場合は「御立派でいらっしゃる」のように「お」「御」を付けた上で「……くていらっしゃる」「……でいらっしゃる」の形と併用することもできる。

この「語によっては」ということは、実は大きな問題である。例えば、「先生は朝がお早い」と言えても、「*お遅い」とは言えない。また、「先生に対してお恥づかしい」のように、「お+形容詞」という形でありながら、意味的に尊敬語でない場合もある¹⁾。

本稿では特にこうした形容詞における敬語表現について、特に「お+形容詞」の形に焦点をあてて考えたいと思う。なお、敬語表現という特性上、個々の語をめぐる用例には必ずと数的限界がある上に、判断のゆれという問題もある。そこで、本稿では、必要に応じて用例を検討しつつも、主に筆者の母語話者としての言語的な思考実験に基づくアプローチを採用する。記述においては、不自然な表現に「*」を、少し不自然と思われる表現に「?」を、表現として不自然ではないが、ある文脈において不適切という場合に「#」を付す。ここでは聞き手あるいは読み手を「対者」と呼ぶ。謙讓語での「動きの相手」と紛れるこ

とを防ぐため「相手」とは呼ばない。

2 従来の研究とその課題 ―語彙的個性性のドグマ―

従来の研究を概観しておく。菊地 1997は包括的かつ詳細に敬語を整理する重要な研究である。ここでは「形容詞・形容動詞の尊敬語」として、「お忙しいですか」「ご熱心ですね」のような例と共に「形容詞・形容動詞には「お／ご」を付けて尊敬語にすることができるものがある」と述べられる。ただし、「どのような語に「お／ご」が付くかは、習慣の問題というしかない」(p. 250)とされている。また、同書の謙譲語の部分では、

「あちら様、今度バリへご転勤ですって。」「まあ、おうらやましいわねえ。」

のような例を取り上げ、「Xには(Xは・に・が)YがZ型」の構文で、Zが心理的な内容を表す語の場合、Yを目的語ととらえるべきケースだと考えられ、「Xには(Xは)Yがおうらやましい」のYを高めており、「謙譲語A(筆者注:謙譲語I)」ということになる」という記述がある(p. 352)。述語の感情の「目的語」(対象)が「Yが」という形であって、謙譲語として位置づけられるという指摘は重要である。

形容詞の敬語を取り上げたものとして、細川 1995もある。「お元気なころの先生がお懐かしいわねえ。」のような表現について、「わたし」の心の様子を表し、対象にモノ・コトおよびヒトをとる評価性形容詞」と位置づけ、「対象内容がコト・モノに限られている場合ではなく、ヒトを対象とした場合に限って、こうした敬語現象が起こることに注目する必要があるだろう」と指摘し、形容詞例を挙げる(細川 1995: p. 81)。ただし、「そのすべてが右のような対象内容を高める敬語用法を有するとは断言できないが」と述べるように、人を対象としてとる用法を考えても「お+形容詞」が成立しない形容詞は存在する。

村田 2012は、「お／ご」の使い分けなど日本語教育への目配りも含めつつ、「お+形容詞」について詳しく分析したものである。形容動詞についても扱い、言えない場合について、外来語、「お」で始まる語、モーラ数の多い語、悪感情を持つ語、などに付かないといった多様な要因を整理している。こうした要因の多重性を指摘する点は高く評価できる。ただし、日本語教育的にまとめた場合「条件として提示するには例外も多い」(p. 119)としているように、一般化の難しさを述べている。

従来の諸研究が指摘するように、形容詞の敬語に関する現象は一般化が極めて難しい。ある側面では文法的な現象に見えても、相当深くまで語彙的個性性がある。最終的には「習慣の問題」「例外も多い」ということで分析に至らないことになる。語彙的という以上、それ以上の分析はできない。「文法的説明における語彙的個性性のドグマ」と呼ぼう。

しかし、文法的な一般化ができるものと語彙的個性性との間には連続性があると考えられることもできる。そこで考えられるのが、語彙的個性性をいくつかのまとまりに分けて小さな一般化を重ねていくというアプローチである。いわば語彙的とされてきた特性をクラスター化することで、語彙的現象にある程度の整理をするのである。「お+形容詞」が成立しない要因としては、形式的側面、語彙論的側面、語用論的側面というように、複数の水準が考えられる。

3 「お+形容詞」の尊敬語用法

3-1 三つの関連要因

最初に尊敬語の用法を取り上げる。「お+形容詞」という尊敬語の形式そのものは、一定程度文法的・生産的なプロセスと思われるが、それを成り立たなくする複数の制約要因がある。根本原因として関わる要因は、音形と語構成による形式的要因、語種と文体による(狭義の)語彙論的要因、そして、語義と用法とに関わる語用論的要因に大別される。

多様な要因があるので、一つの形容詞が複数の要因にあてはまる場合も当然出てくる。そこで整理の順序として、形式的なものから、語彙論的なもの、そして、語用論的なものへ、というように、制約の在り方が強いものから考えていく。大きくは語群のまとまりとしての性格づけができそうである。以下、具体的に、「お+形容詞」という構造にならない制約を中心に関連形式にも触れながら検討していきたい。

3-2 形式的要因

まず、音形と語構成という形式的要因から始めたい。まず注目すべきは語頭音である。村田 2012の指摘にもある通り、語頭オ音の語には「お」がつかない。

おいしい、多い、大きい、おかしい、幼い、惜しい、遅い、恐ろしい、重い、思いがけない、おもしろい

など語頭オ音の形容詞には「お」は付加しない。ちなみにこの要因はよく知られているように、名詞でも指摘でき、例えば「お+着物」と言っても「お帯」と言えない。ただし、動詞の場合はこの制約はなく「お置きなさる(尊敬語)・お送りする(謙譲語)」のように言える。動詞の場合に音形による制約がないのは、後部要素があることでより文法的・生産的なプロセスとして成立してしまっているということだと思われる(後述)。

さらに、これと関連して、語頭オ段音(オそのものは除く)の語への「お」付加制約の傾向もある。

こそばゆい、恋しい、好ましい、こわい、そつない、そそっかしい、遠い、尊い、細い、ほどよい、脆い、よい

などは「お」をつけて言いにくい(なお、「よい」もオ段音だが後述するように2拍の制約もある。後述)。例えば「尊い」といったプラス評価であっても、「*あの方はお尊い」などとは言えない。ただし、例外はある。「よろしい」と名詞「心」を含むものなどである。「よろしい」の場合、「先生はご機嫌がおよろしいようだ」などと言える。「よろしい」という一般的によく使用する形容詞であることから例外になっているものと思われる。「心苦しい、心強い、心細い、心優しい」などの「心」のタイプも例外で、「優秀な助手をお持ちだから、先生もさぞお心強いことでしょう。」などと言えそうである。「お心」というつながりが比較的高頻度で出現することから許容されやすいのであろう⁽²⁾。

次に問題になるのが音数である。村田 2012はモーラ数の長い語は「お+形容詞」が言えないとして「すばらしい、温かい、新しい」などを挙げる。確かに「*おすばらしい」

などは言いにくい。しかし、同論文が「忙しい、美しい、恥ずかしい、難しい、珍しい」などを例外として指摘するように、5モーラ以上の語でも「お+形容詞」の尊敬語が言える例は一定数ある。ほかにも、「さぞお心もとないことをごさいます」の「心もとない」のように7モーラの語でも言える。モーラ数の長さは本質的な要因と見るべきではない。

もっとも、モーラ数（語の長さ）の関わりはある。それはむしろ短さである。例えば、
憂い、いい、ない

のように2モーラの形容詞は、「お」をつけることはできない。「濃い、よい」などもあるが、語頭才段音の語でもあり、ここでは挙げない（以下同じ）。「*先生の御都合はおいしいのだ」などとは言えない⁽³⁾。この語形の長さの制約は、「お手」などと言えるように名詞では関わらないが、動詞の場合、「*お煮になる」と言いにくいように、連用形が一拍になる場合に「お」がつきにくい。これは「見る、着る」などにおいて、語彙的な「御覧になる」「御召しになる」などの尊敬語形が別途存在することとも関わる（窪田 1992）。

次に考えたいのは「語構成的要因」である。語構成としても、接頭辞の「お」をつけることはいわば多少不安定な構成となると思われる。一体性がない場合には不安定になるのである。これはとりもなおさず、語としての「長さ」にも関わるが、本質的なところで関わるのは、前述のごとく拍の長さではなく、語構成的要因とすべきであろう。例えば、「*おまめめしい」などと言えないように、

あらあらしい、いまいましい、くだくだしい、けばけばしい、ずうずうしい、猛々しい、はかばかしい、福々しい、まめめめしい、みずみずしい、めめしい、若々しいなど、「XX しい」型の語などに「お+形容詞」は言えない。

接頭辞や接尾辞による派生的な語形も、語としての一体性に関わり、「お」という接頭辞をつけることに抵抗がある。まず、接頭辞が付くものとして、例えば「先生はお身体がお弱い」と言えても、「*先生はお身体がおか弱い」と言えないこと、「先生はお若い」と言えても「*先生はおうら若い」と言えないことなどが注目される。「て+いらっしやる」であれば、「先生はお身体がか弱くていらっしやる」のように言える。

接尾辞の構成によるもの、すなわち、

飽きっばい、泣きっばい、忘れっばい（動詞）／田舎っばい、偽物っばい、水っばい、昔っばい（名詞）／白っばい、安っばい（形容詞）

などの「～っばい」型、および、

あぶない、いけない、さえない、つまらない、さりげない、情けない／せわしない、せつない（語源的には「～甚い」のタイプで異質）

などの「～ない」型、

はれがましい、非難がましい、忌まわしい、疎ましい、慕わしい、嘆かわしい、涙ぐましい、かぐわしい、輝かしい、腹立たしい、待ち遠しい

などの「～がましい」型や「動詞+しい」型、など接尾辞による構成となっているものは語としての一体性が弱く、「お+形容詞」の表現を組み立てる形容詞にはならない。ただし、後述する「傷ましい、いたわしい、うらやましい、懐かしい、恥ずかしい、見苦しい」

など尊敬語と違うタイプのものでは「お+形容詞」という形はある。

なお、生産的に「動詞+にくい」や「動詞+やすい」などに「お～」をつけた構造の場合、「お～」を形容詞につけるといよりも、尊敬語を動詞に付けた上で「にくい」「やすい」などの接尾辞を付加するという構造になる。例えば、

〔先生がお話しになり〕 やすい、〔先生がお使いくださり〕 やすい

などは言え、「お～になる」という構造との共起はある。謙讓語の場合も、

〔先生にお話しし〕 やすい、〔先生にお使いいただき〕 やすい

のように言える。これらは「尊敬語や謙讓語を含む動詞句+やすい」である⁽⁴⁾。

なお、「お求めやすい」という言い方が広告などで近年よく目に付くようになっていて、個別の例外のようにも見えるが、これは本来「お求めになりやすい」という形のものから生まれた語形である。たとえ広告でも「お履きやすい」などは言えないように、この語形は一般的なものにはなっていない。

「形容詞+形容詞」という複合語の構造の語、すなわち「青白い、赤黒い、甘辛い、甘酸っぱい、堅苦しい」なども言いにくいように思われる。例えば、「お顔がお白うございますよ」などと言えそうに思われるのに対して、「?お顔がお青白うございますよ」となると少し言いにくくなるのではないだろうか。

「名詞+形容詞」型の語構成のものも、「しかた（が）ない、申し訳ない」のような組み立て意識があるもの（「申し訳ございません」のように「ない」に対する「ございません」が使えるようなもの）はもちろん一体性がないと言えるが、「色濃い、塩辛い、名高い、幅広い、人恋しい」なども、意味的には「色（が）濃い」などの関係に分解できる複合語で、語の意識として一体性に欠ける点で「お+形容詞」という形にならないようである⁽⁵⁾。ただし、特に「心、手、情け」など主語人物の「部分」を含む語構成のものは、一体性とは別に、主語への尊敬という意味に合致する点で、「お心強い、お心優しい、お手堅い、お情け深い」などと言えそうに思われる（「心」については前述のような頻度的問題がある）。

以上、「お+形容詞」になる上での形式的側面について見てみた。これにはまず、語頭オ音による制約、語頭オ段音の傾向など語音の問題、2拍語の制約といった音形的な問題がある。また、「XX しい」、接頭辞型、動詞などに付加した接尾辞型、名詞や形容詞どうしの複合による複合形容詞など、いわば一語基でない複合的構造のものは、語としての一体性の意識に欠け、接頭辞としての「お」を付けてそのまま述語とすることに抵抗感があると見えそうである。もっとも、語としての一体性ということは、一種の意識の問題でもあり、名詞との複合形容詞における「お心強い」のような例外も存在する。

動詞の場合、「お～になる」という構造はもう少し文法的な手続きとして安定していて、「先生がお話ししかけになる」のような語彙的複合動詞では問題なく「お」の付加が成り立つ。ただし、「?先生がお話しそこないになる」などと文法的複合においては多少違和感があるように思われる。文法的複合動詞のように合成的な意識が強い場合、やはり一体性に欠け、尊敬語の接頭辞の「お」の付加が多少不安定になるものと思われる。この背景には

「お」が単母音の接頭辞であり形態的に安定が必ずしもよくないということが指摘できよう。

音配列の問題や形態的な一体性に関わって「お」をつけることができないものについては、「お+形容詞+ていらっしやる」という形も言いにくく、「*お遅くていらっしやる」などとは言えない。しかし、「お」をつけない形である「形容詞+ていらっしやる」は言え、一種の表現上の代替手段を補償することにもなっている。例えば、「遅くていらっしやる、尊くていらっしやる、あらあらしくていらっしやる、晴れがましくていらっしやる、飽きっぽくていらっしやる、黒っぽくていらっしやる、か弱くていらっしやる」などは、意味的に適合する限り（後述）、成立する。

3-3 語彙論的要因

次に、語彙論的要因について見ていく。まず、語種的要因がある。これは形容動詞において「おスマートな」などと言えないといった問題である。語種は「お・ご」の違いなどにも対応する。しかし、本稿で取り上げる形容詞は基本的に和語ないし和語扱いの語であり、ひとまずここでは関わらない⁶⁾。

もう一つ関わるのが、「文体的意味的要因」である。語彙には使用領域があるが、敬語に関わらないようないわゆる俗な文体の語はそもそも敬語形式と共起しない。例えば、

ごっつい、じじむさい、邪魔くさい、せこい、でっかい、ちっこい、ちよろい、ちんまい、ばばっちい、みみっちい、むさい、やばい

などはそもそも敬語表現との共起に制約がある。「お危なうございます」が言えても「*おやばうございます」とは言いにくい、そもそも、「*やばくていらっしやる」とも言いにくいように、「お+形容詞+ていらっしやる」「形容詞+ていらっしやる」型の尊敬語としても文体的違和感があり、言えない。

3-4 語用論的要因

「語用論的要因」とは、語用論的な適切性からの制約である。まず、第一に評価語の類、特に「上から目線」の評価的な形容詞は、領域侵犯性を持っていて、尊敬という意味にそぐわない。例えば「#あの先生はお賢い」「#先生はおかわいい」とはふつうには言えない。

賢い、かわいい、かわいらしい、聡い、素晴らしい、鋭い、頼もしい

などが尊敬語にはならないのは、「#先生、賢いですね」などと本人に言うことと失礼になるということと軌を一にしている（鈴木 1989）。なお、不適切な条件が回避されれば、「先生の赤ちゃんは、おかわいらしい」のように言えそうである。また、文脈的に、例えば「こういう言い方は不適切だが」といった注釈を加えて、「こういう言い方は不適切だが、あの先生は本当にお賢い」のようになると多少使う余地が出てくるようにも思われる。

これと関連して性格評価語も、個人的領域である性格に関わる点で領域侵犯的な評価につながり、尊敬語としての意味に合致しない。「あの先生は {?お冷たい・?お温かい}」などと言いにくいのではないだろうか。「明るい、温かい、冷たい」などは、性格という個

人的なものを直接的に評価づけ、いわば「上から目線」に連続する側面がある。これは連語的關係でも成立する。例えば、「?あの先生はお気がお長い」などと言にくいのは、「気が長い」という性格的評価を加える連語が尊敬表現として適切ではないからであろう。一方、同じ「長い」でも「あの先生はこの学校にお長い」のように、性格評価からずれることになれば問題なく使える。

ただし、性格の評価でも、「(学生に対して) お甘い、お厳しい、おやさしい」などは言える。これらは個別の語彙の意味として他者へのふるまい方を表し、ある種の権力性が認められる点で、敬意に欠ける側面は小さく、尊敬語として使う余地があるようである。

第二に、内面感情語も領域侵犯的要因があり、「#先生、うれしいですか?」などと言うと失礼になると同様に、尊敬語との共起は不適切である。

嬉しい、悲しい、かゆい、くすぐりたい、煙たい、快い、心細い、寂しい、楽しい、眠い、まぶしい、やましい

などの形容詞も「お+形容詞」での尊敬語が言にくい(後述するように、感情を表す語でも「おうらやましい、お恥ずかしい」のような非尊敬語的用法のものはあるが、これらは話し手の敬意の対象に対する感情を表す点で、ここで述べるタイプではない)。

第三に、マイナス属性の評価語も、語用論的に尊敬語としての用法を持ちにくい。

荒い、荒っぽい、あざとい、厚かましい、怪しい、卑しい、鬱陶しい、きたない、きつい、気難しい、臭い、くどい、けち臭い、さもしい、しがない、しつこい、しぶとい、ずるい、つまらない、憎らしい、憎たらしい、ばからしい、みすぼらしい、やらしい

などは通常の断定する文脈では「お+形容詞」での尊敬語は言にくいようである。これは、謙讓語で「先生をお囲みして楽しい時を過ごす」と言えても「*先生をお囲みしてお殴りする」とは言えないといった、現代敬語における敬意の關係認定の語用論的特性から説明される(森山 1989)。しかし、制約としては弱く、文脈を調整すれば言えそうになる場合もある。例えば、「?お荒い」「?おずるい」とはあまり言わなくても、「あの先生の筆遣いは少々お荒いように見えるが、実はとても精緻なのだ。」「先生のことをおずるいなどと言うのは間違いだ。」のようにマイナス評価に関わる条件を調整しなおすことで言いやすくなる。こうした点から語用論的制約としての位置づけが適切である⁽⁷⁾。

以上「お+形容詞」が言えない語用論的要因について見てきたが、「{*お・φ}+形容詞+て+いらっしゃる」についてはどうだろうか。「お+形容詞+ていらっしゃる」という形にはやはり「お+形容詞」と同じく違和感があるが、「形容詞+いらっしゃる」という形そのものは使える範囲は広い。「上から目線」の評価語においても、「あの先生は{*お・φ}かわいくていらっしゃる」、性格において「あの先生は努力しない学生に対しては{*お・φ}冷たくていらっしゃる」、内面感情語において「あの先生は{*お・φ}嬉しくていらっしゃるようだ」、というようにいずれも言える。マイナス評価の語でも、失礼になるかどうかということをついぶん捨象してもよい場合は、「申し上げにくいことだが、先生は{*お・φ}臭くていらっしゃる」のように言えそうである。このように「お

+形容詞」という構造は、形容詞に直接尊敬を表す「お」をつける点で、意味的にも共起上の制約が強い。これに対して、「形容詞+て+いらっしやる」は形容詞の問題というよりも、形容詞は連用形になっているのであって、「いらっしやる」という尊敬語動詞が広く使えるということであり、制約が強いわけではない。

3-5 使用における構造的条件

「お+形容詞」という構造を作る場合の条件について見てきたが、最後に、出現環境にも触れたい。例えば、「広い」の場合、「あの先生のお屋敷は大変お広いよ」のように「お+形容詞」が言えるが、「?お広いです」のような言い方には多少の抵抗感がある。丁寧表現にする場合には「お広うございます」のような形の方が言いやすいのではないだろうか。「形容詞+です」は現在ではもはや一般化した表現であるが、「お+形容詞」といういわばわざわざ敬語化した表現にはなじみにくい側面があるようである。

また、「先生のお広いお屋敷」「お屋敷がお広くて～」のような修飾は全く問題はない。先に語構成的に言いにくい例を述べたが、例えば「?あの先生のご努力はお涙ぐましい」には抵抗感があっても、「お涙ぐましいご努力」のように名詞修飾の形にすると受け入れやすくなる。終止させる場合に違和感が出やすいことがあるようだが、この原因はよくわからない。

4 非尊敬語用法の「お+形容詞」

4-1 謙讓語用法と丁寧語用法

次に、「お+形容詞」の構造における非尊敬語用法の様相を見ていきたい。これには「謙讓語の用法」（「おうらやましい」などのタイプと「お見苦しい」などのタイプ）、「丁寧語の用法」（「お暑うございます」などのタイプ）とがある。

4-2 謙讓語用法

まず、「お恥ずかしい」のように、対象を対象とした感情を述べるものの場合、「感情の対象」への敬意を表すものがあり、謙讓語用法と呼べる（「お恥ずかしい」型としておく）。例えば、「お恥ずかしいです。」のように、

傷ましい、いたわしい、うらやましい、心苦しい、懐かしい、恥ずかしいなどの語が挙げられる。意味的には、「懐かしい」のようにプラスの感情もあるのだが、基本的に「いたわしい」のように同情を表すもの、「恥ずかしい」のように本来そうあるべきではない自分の感情を表すものがある。ちなみに形容動詞でも、「御迷惑だ、お気の毒だ」などは本来そうあるべきではないという意味だが、これらも対象への敬意を表す⁽⁸⁾。

では、なぜこれらの形容詞において謙讓語的用法があり得るのであろうか。考えられるのは、菊地 1997、細川 1995が指摘するように、「XはYがZ（感情評価の属性）」という構造のもので、構造としてYという「対象」の「人」があること、そして統語的には「が」でマークされることであろう。Yそのものは主格で取り上げられる点で、尊敬語への連続

性が考えられる。従って、例えば「XはYにお優しい」など形容詞が何らかの対象項をとるものであっても、ハガ構造にならないものはこのタイプの敬語用法を持たない（尊敬語としての用法になる）。

さらに、主語の特性として、感情形容詞の場合、基本的にXは話者であるということも重要である。そもそも感情評価的な形容詞の場合、主語に人称制限があり、その感じ手であるXはふつう話者である。そこから、語用論的に、主語Xを高めるという解釈が生まれにくくなり、尊敬語としての解釈が阻止されるということも考えてよい。こうした二つの理由から、「お+形容詞」がこうした特別な関係の場合において謙讓語の用法をもっていると説明できるのである⁹⁾。

ここから、この謙讓語用法における話者・対者間の現場性も指摘できる。確かに、「おうらやましいわね」「お懐かしい」などは、丁寧語なしの用法もあるが、典型的用法は、感情の対象が対者でもある場合だと考えられる。丁寧語なしで「いやあ、お恥ずかしい。」のように使う場合も、対者への文として解釈されるのがふつうであろう。これは素材敬語ではあるが、丁寧語をあえて外した「君にこれを差し上げよう」のような用法に近く、この用法は謙讓語ではあるが対者を意識したものと言うべきである。従って、感情の対象が対者ではない場合、主語が話者であっても、例えば、「?俺は亡き恩師がおうらやましいよ。」とは言いにくく、「あなたがおうらやましい」のような用法の方が典型的だと思われる。

なお、感情・評価を表す形容詞でなくても、話者側を主語として対者へのマイナス属性を敬意と共に表すものはある。すなわち、「機械の調子が悪くて、私のプレゼンは、いささか【お聞き苦しい・お見苦しい】うございますが、何とぞお許し下さい。」などと言える。これらの場合、「私のプレゼンはお聞き苦しかったようだ」のように、丁寧語なしの用法も一応は言えそうに思われる。「お聞き苦しい」「お見苦しい」の主語は「私のプレゼン」であり、「私」本人ではない（「お聞き苦しい」型としておく）。これは主語名詞がいわばメトニミー的に拡張しているが、敬意は「聞かせる、見せる」相手に向かう点で、「お見せする」「お聞かせする」といった謙讓語を下敷きにできた用法と見てよい。

これらも、マイナス価値であるということが本来そうであるべきではないという点で特に敬語を使うような関係の間で話題になりやすく、その結果こうした敬語的表現が部分的に発達しているものと考えられる（その意味で主語が下がる点で、丁寧語に接近している）。これは次に述べる丁寧語用法にもつながる。

4-3 丁寧語用法

一方、丁寧語の用法としての「お+形容詞」もある。例えば「暑い、寒い、安い、高い」などは、「毎日お暑うございます」のように言える。これらは丁寧語を伴わずに、「*やあ、お暑い！」などとは言えない。構造的にも「XはYがZ」という構造ではなく、Yのような対象はなく謙讓語的要素はない。「暑い」の場合はいわば気候が主語となっており、前述の謙讓語のタイプとは違っているのである（「お暑うございます」型と呼ぶ）。丁寧語との共起の必要性、上級丁寧語というべき対者への高い敬意という点から、丁寧語用法と

して位置づけるべきであろう。語義的に、「お暑い、お寒い」はあるが、「温かい、涼しい、気持ちいい、快い」などに「お」はつかない。これは、語用論的によく言及される属性かどうかの頻度的な違いとして説明されよう。

同様に、「こちらの商品はかなりお安くございます。」のような用法もある。この場合、その主語は商品という（販売段階では）自分側のものである。同じ「安い」でも「あの先生のご講演料はかなりお安いようだ」のように言う場合は通常の尊敬語であるが、主語が敬意の対象ではなくなる場合、丁寧語を伴って対者への敬意を表す丁寧語である。「お久しぶりでございます」なども同様であろう。「安い、高い」などは商行為でよく出てきやすい語であり、「久しい」なども久闊を叙する表現での語である。そうした語用論的動機付けによって生まれた対者的な丁寧語的表現とみてよい。従って丁寧語を伴わずに「*お安いよ」「*お久しいね」などと言うことはできない。

なお、付加する丁寧語であるが、この場合も、「です」をつける用法は、他の一般的な形容詞と比べてまだ十分に安定していないようである。例えば、「お聞き苦しいです」「お安いです」のように「です」の付加よりも、「お聞き苦しいところをお見せしてしまいました」「お安くなっております」のように修飾の形や、「お聞き苦しくございます」「お安くございます」のように「連用形+ございます」の方が安定するのではないだろうか。

以上、形容詞の非尊敬語的用法について、その意味との関連で丁寧語的な謙讓語用法があること、そして、丁寧語と共に起して対者への敬意を表す丁寧語化した用法があることを指摘した。それぞれの用法になるには、主語名詞の特性が関わっている。

5 おわりに

「お+形容詞」という敬語形式は、文法的な手続きであると同時に、従来の諸研究が指摘するように、語彙的特殊性が深く関わっており、形式の成立にも、その意味にも多くの例外があり、その記述は困難だとされてきた。

そこで、本稿では、形式的側面と意味的側面に分けて、「お+形容詞」が成立しない要因を考察した。その結果、まったく無秩序な個別的語彙的現象ではなく、一定の要因による語のまとまり（要因のクラスター）があることが明らかになってきた。紙幅の関係上語例は略すが、「お+形容詞」の尊敬語用法が言えない要因は大まかには次のようにまとめられる。

- ・形式的要因：基本的に強い制約。「て+いらっしゃる」は可能。「お+形容詞+ていらっしゃる」は不可。
 - ：語頭オ音の制約、語頭オ段音の制約（「心～」型などは例外）、二拍語制約
 - ：語構成的制約（一語基からなる形容詞でなく一体性に欠ける場合。「XXしい」型、接頭辞があるもの、接尾辞があるもの、複合形容詞など）
- ・語彙論的要因：基本的に強い制約。「お+形容詞+ていらっしゃる」は不可。
 - ：語種的要因：基本的に和語でなければならない。
 - ：文体的要因：俗な文体では使わない。：「て+いらっしゃる」も不可。

- ・語用論的要因：弱い制約。調整可能。「て+いらっしやる」は文脈さえ合えば使えるが、「お+形容詞+ていらっしやる」は不可。

：「上から目線」の評価語の制約、性格評価語の制約、内面感情語の制約、マイナス属性の評価語の制約

使用できる文脈として、「です」終止よりも「ございます」終止や修飾用法になる方が自然という使い方の傾向などの構造的条件も指摘した。

述語を尊敬語化して述べる場合に、「お+形容詞」という形は、文法的生産的な組み立てと言えそうだが、属性を記述する形容詞に直接「お」をつける点で制約が強い。しかし、その制約は無秩序なものではなく、形式的、語彙的、語用論的という三つの層にわたるものとしてある程度の整理ができるのである。

非尊敬語用法も、次のようにまとめられる。

- ・謙讓語用法：

：「お懐かしい」型（「XはYがZ」という構造）、「お恥ずかしい」型（話者側が対象に対して）：謙讓語的

：「自分側が対者側に対して」という構造（「お聞き苦しい」型）：丁寧語に接近

- ・丁寧語用法：丁寧語が必ず共起。

：「お暑うございます」型

このうち、丁寧語的用法に関連して指摘しておきたいことは、対者敬語性という問題である。実は名詞にも対者敬語的要因があるものがある。一つは従来指摘されてきた「謙讓語Ⅱ」として挙げられる「拙著、小社」などの丁寧語の名詞である。「自分に関することを控え目に表す語」（文化庁（2007） p. 19）であるが、対者への敬意を表し、対者がいない状況では使えない。しかし、もう一つ、森山 2015で述べたように、対者に関することを高める尊敬語の名詞もある。例えば、「貴社、御社、貴校、玉稿、ご尊家、芳名、ご尊顔、ご尊名」などは従来尊敬語として位置づけられてきたが、事実上、対者に対してしか使われない。このように名詞においても対者への敬意を表す用法への展開が観察されるのである。ここで見た「お暑うございます」のような形容詞の非尊敬語的用法においても、対者への敬意を表す一定の表現がある。対者への敬意を表す方向で様々な敬語表現が展開しているということには注意してよい。

以上、「お+形容詞」の二つの用法をめぐって、語彙的個別的とされる現象が、「要因のまとめり」を整理することで、ある程度分析できることを指摘した。もちろんそれでも例外となる個別の語の存在はあるが、その場合でも頻度的要因など、ある程度の例外の説明ができることが望ましいであろう。スキーマという言い方をすれば、文法的生産的な一般化できるスキーマに対して、例外となる要因のスキーマもまた多様に存在すると考えられる。そこで、いわば愚直に要因のクラスターを明らかにしていくというアプローチが必要となる。

最後に、名詞や動詞における「お」の付加との違いにも触れておきたい。形式的制約を見た場合、これらへの「お」の付加は、必ずしも形容詞ほど強く制約されるわけではない。

この原因として考えられるのが、まず、動詞の尊敬語の場合の「お～になる」「お～される」、動詞の謙讓語の場合の「お～する」というように後部要素が付加するという点である。いわば後部要素に助けられる点で、音形的制約も含め、「お」という接頭辞を付加することによる形式的制約は緩いのではないだろうか。一方、形容詞の場合、述語としての機能を持ちつつ、前に「お」を付けるだけで敬語化することになる。敬語表現を作る手続きとして、いわば安定性が脅かされやすくなると考えられる。後に「ていらっしやる」を付ける場合も、「お+」が無い場合もあるのであって、「お+形容詞+ていらっしやる」という形で一体化しているわけではない。こうした考え方が成立するのであれば、「お+形容詞」も、修飾用法など終止的でない場合に多少使いやすくなるということも位置づけられるかもしれない。名詞の場合、述語としての用法はないが、いわばサンドイッチ型の形式でない点で、やはり「お」との非共起など音形的制約は一部に残る。なお、語彙論的制約や語用論的制約は、いわば敬語使用の一般的制約であり、ここでは触れないが、動詞の場合も名詞の場合も基本的に同じように適用されることになると思われる。

今後の課題もある。第一に、当然客観的な容認度・使用頻度についての数的検証の課題は残る。用例を調査し、具体例を拡充することも必要である。それぞれの要因の言いやすさ、言いにくさを、アンケートでの容認度や大規模用例調査による用例頻度から計算し、要因としての「重さ」を計測するような手法も考えられる。第二に、ここでの分析を形容動詞などの他の品詞に拡張していくことも課題である。形容動詞の場合には語種も関わるほか、「先生にご迷惑だ」のように謙讓語用法も観察される等の現象がある。さらに、第三に、文法的説明における語彙的個別性のドグマという点での検討も必要である。文法的ながら相当程度語彙的要因があるという形式は多様にある。個別の例外的現象も多い。「お求めやすい」のように使用頻度の高い個別の言い方が耳になじんでくるということもある。他の「複雑な語彙的個別性」に関わる現象を、語彙的連続性からいかに整理するかも課題である。

注

- (1) 後述するように、これは主語名詞の性質に深く関わり、謙讓語的用法と丁寧語的用法がある。なお、「～ていらっしやる」にはこうした非尊敬語の用法はない。
- (2) 「お心」という文字列の出現はインターネット上でも多く「Yahoo! JAPAN」でのヒット数は約1,110,000件であった。名詞を中心に頻度の高い連鎖があり、「心」を含む形容詞でも使用上の違和感がなくなるという可能性はある。
- (3) 「濃い」は物が主語になるという別の要因の可能性もあるが、メトニミー的に味付けなどに拡張できるのでその立場はとらない。例えば対義語の「薄い」の場合、「先生はお薄いのがお好みだ」などと言えるが、「*先生はお濃いのがお好みだ」とは言えない。
- (4) 動詞付加の助動詞が形容詞の接辞かという問題である。動詞付加の助動詞の場合「学生祭りでは学生たちは[大声で騒ぐ]_{jo}。特にアイドルが関わると[そうし]_iやすい」などの形で前部要素だけを照応させることができる。一語化が進んでいるとみられる「傷つきやすい」の場合には「*中学生は[よく傷つく]_{jo}。厳しく指導すると[そうし]_iやすい」のような照応関係にはなりにくい。

- (5) 「味気ない、屈託ない、面目ない」などは、ふだんは「が」を入れないが「～がない」というタイプとして、一体性に欠ける印象がありそうである。
- (6) 文体的意味も関わるが、「*おナウい」などは言えない。なお、漢語の場合「忍耐強い、興味深い」のようなものもあるが、前述のように、「名詞＋形容詞」の構造になる点で「お＋」は付かない。ただし、「忍耐強くていらっしやる」のように、「形容詞＋ていらっしやる」は言える。
- (7) 従って制約としては弱いことになる。ただし、語によっては文脈の調整いかんに関わらず言えないというものもある（例えば「*おつまらない」など）。
- (8) 先に形式的要因として触れたように、「動詞＋接尾辞」という構成でありながら、「お＋形容詞」の謙讓語的用法が成立するということは、「おうらやましい⇔おうらやみ申し上げる」というように、動詞との結合が強いということかもしれない。なお、このタイプも語による個性がある。例えば、「おめでたい」も基本は本来は話者側の感情と言えるが、「新年がおめでたい」と言えるように敬意はもはや感じられず、美化語化している。
- (9) 形容動詞ではあるが、例えば「好きだ」の場合、謙讓語的用法がない。「XはYがお好きだ」のように、対象をとる構造点は同じでも謙讓語的用法がないのは、「好きだ」には人称制約がなく、Xには話者以外の主語も来ることができるという点に求められる可能性がある。すなわち、主語（すなわち通常はXの方）を高めるというのが「お＋形容詞」の本来の（主要な）在り方だとすれば、対象への話し手の感情を表す形容詞において、「Xハ」の位置に話し手が来ることと、ハ・ガ構造の持つ特異性に従って、Yという感情の対象も「Yガ」というマークを受けて敬意の対象として拡張しようということから位置づけられるのである。

参考文献

- 大石初太郎 (1966) 『正しい敬語』 大泉書店
- 菊地康人 (1997) 『敬語』 講談社学術文庫 (角川出版 1994)
- 窪田富男 (1992) 『敬語教育の基本問題 (下)』 国立国語研究所 (大蔵省印刷局)
- 鈴木 陸 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」 日本語学8-2
- 文化審議会答申 (2007) 『敬語の指針』 平成一九年度文化審議会答申 (文部科学省)
- 細川英雄 (1995) 「形容詞・副詞の敬語法」 『國文學 解釈と教材の研究』 40-14 p. 78-81
- 辻村敏樹 (1967) 『現代の敬語』 共文社
- (1992) 『敬語論考』 明治書院
- 宮地 裕 (1968) 「現代敬語の一考察」 『国語学』 72
- (1971) 『文論』 明治書院
- 村田志保 (2012) 「形容詞の敬語表現と接頭辞「お／ご」の関連性について—日本語教育初 級レベルでの導入を目指して—」 『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』 18 p. 119-133
- 森山卓郎 (2008) 「命令表現をめぐる敬語の体系」 『日本語学』 27-7 pp. 18-26
- (2013) 「丁寧語について」 p. 1-20 『国語と国文学』 90-7 東京大学国語国文学会
- (2015) 「聞き手敬語としての名詞—丁寧語としての名詞—」 『外语教育研究』 2015年号、大連理工大学
- 森山由紀子 (1989) 「謙讓語成立の条件—「謙讓」の意味をさぐる試みとして」 『奈良女子大学文学部研究年報』 33, p. 1-20